

1 文（文章）で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A

a 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。

b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。

ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されています。

c ある要素に加点するか否かが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点（独立採点）すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d **解答通り**という条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B

a 答案中に大きな誤読と判定される内容（語句）などがある場合は、その内容（語句）を減点要素として示されている場合もあります。

b 加点要素でも減点要素でもない部分もあります。その部分は加点も減点もしません。

C

次に該当するものは、答案の形式上の不備として、**一箇所につき1点の減点要素**とします。

a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b 脱字。

c 文末の句点の脱落。

※字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。

たとえば「…とはどういうことか？」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。

また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

※ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。

c 答案の文章が最後まで完結していないもの。

d 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたもの。

e 字数指定のある設問で、制限字数の半分に満たない場合は「字数不足」と記し、全体×として、0点とします。この原則と異なる採点をする場合は、採点基準で指示します。

一 (評論) 採点基準 (合計 40点)

問一 各1点 (計5点)

- 1 綻
- 2 吟味
- 3 浮薄
- 4 尊崇
- 5 潰

※解答通り

A ○2点
宇宙論が科学者の中で一般化していきると、

B ○2点

それまでの定説が覆されるような新説が出てくるが、

C ○4点

それは多くの場合、新説を発表した科学者自身の過大解釈や錯覚や想像力の不足などによる誤認であるが、

D ○4点

それはあたかも、神が、誤認を犯す人間などには計り知れない領域があることを知らしめているかのようなものであるということ。

※A・B・C・Dに関して部分採点

A 「宇宙論が科学者の中で一般化していきると」(2点)

※「傲慢になりがちな科学者」が出てくることの前提の説明。

○「かつては限定された科学者のみが宇宙論を扱っていたが、その後多くの科学者がそこに参入するようになった」も可。

△「人工衛星の発達で宇宙論の研究者が増えてくると」は、本文の説明の一部分だけの指摘であるので▲1点減点で△1点。

B 「それまでの定説が覆されるような新説が出てくるが」(2点)

※「傲慢になりがちな科学者」が出てきた結果として生じた事態の説明。

△「それまでの定説を覆そうとして新説が発表されるが」は、そのようなことは本文に示されていないので▲1点減点で△1点。

C 「それは多くの場合、新説を発表した科学者自身の過大解釈や錯覚や想像力の不足などによる誤認であるが」(4点)

※「傲慢になりがちな科学者」が犯す失敗の説明。

△「そうした新説は見落としてによるものであるが」は、本文の説明の一部分だけの指摘であるので▲1点減点で△3点。

△「それは科学者の早とちりであるが」は、本文の説明の内容に触れていないので▲1点減点で△3点。

D 「それはあたかも、神が、誤認を犯す人間などには計り知れない領域がある」とを知らしめているかのようなものであるということ」(4点)

※「老獪な神のたしなめ」の説明。

△「その間違いを神が分からせようとする」は、「間違いを」ということは本文に示されていないので▲1点減点で△3点。

×「神が人間の説く理論と矛盾するような現象を創出している」は、「もともとの理論」にも「事実の誤認をして示される理論」にも一致しないので×0点。

A ○2点

「アインシュタインは宇宙の記述する際に根拠が不明な「宇宙項」なるものをつけ加えてしまったが、

B ○4点

「それは彼が神を尊崇するがゆえのことであるので、神に忠実であると言え、

C ○2点

「フリードマンはアインシュタインの「宇宙項」を排除して宇宙についての記述をしたが、

D ○4点

「宇宙は神が創造したと考えるならば、フリードマンもまた、神に忠実であると言え、

E ○2点

「どちらが真に神に忠実であるとは明確にできないから。

※A・B・C・D・Eに関して部分採点

A 「アインシュタインは宇宙の記述する際に根拠が不明な「宇宙項」なるものをつけ加えてしまっ
たが、」(2点)

※アインシュタインの宇宙の記述についての説明。

B 「それは彼が神を尊崇するがゆえのことであるので、神に忠実であると言え」(4点)

※アインシュタインがなぜ「神に忠実」であるかの説明。

C 「フリードマンはアインシュタインの「宇宙項」を排除して宇宙についての記述をしたが」(2点)

※フリードマンの宇宙の記述についての説明。

D 「宇宙は神が創造したと考えるならば、フリードマンもまた、神に忠実であると言え」(4点)

※フリードマンがなぜ「神に忠実」であると考えられるのかの説明。

× 「その点(Cの内容)でフリードマンは神に忠実だった」は、宇宙と神の関係について触れていないので
×0点。

E 「どちらが真に神に忠実であるとは明確にできないから」(2点)

※両者について、本文の記述が「〜か」という疑問の形になっていることについての説明。

○ 「両者ともに神に忠実であると言えるから」も可。

× 「アインシュタインの方が神に忠実であったから」は、本文の記述に反するので×0点。

A ○3点

高い才能を持つ科学者が、ある事象について他に先行して説き明かしたとして、後にそれが誤ったものであったとしても、

B ○3点

後続する科学者たちは誤った部分を修正できずすれば、

C ○3点

その時点で修正をした科学者の成果になる」ともあると「い」と。

※A・B・Cに関して部分採点

A 「高い才能を持つ科学者が、ある事象について他に先行して説き明かしたとして、後にそれが誤ったものであったとしても」(3点)

※「天才の失敗」を一般化しての説明。

△「アインシュタインの失敗は」は、アインシュタインの具体的な話題にとどまって、一般化できていないので▲1点減点で△2点。

B 「後続する科学者たちは誤った部分を修正できさえすれば」(3点)

※「凡才」を一般化しての説明。

×「アインシュタインの宇宙論が中心となっているので」は、一部のことでない説明になっているので×0点。

C 「その時点で修正をした科学者の成果になる」ともあると「い」と」(3点)

※「飯の種」を一般化した説明。

△「後の科学者の成果となる」は、必ずそうなることを説明していて、傍線部「〜と言えないでもない」のニュアンスが示されていないので▲1点減点で△2点。

×「後の研究者の新たな発見の糧となる」は、「新たな発見」が間違っているので×0点。

×「後の研究者たちの宇宙論の議論を活発化させる」は、「飯の種」を言い換えているわけではないので×0点。

問一 かつて人類学者が行ったような、そこで暮らす人びとの生活や文化を調べてそれを人類学の研究成果とできる具体的な現実の場所という意味においては、私たちが知らない遠い異郷はなくなったということ。(93字)

・①＝2点、②＝4点、③＝3点。(計9点)

① (未開の世界とは) 人類学者が遠く出かけて苦勞して探し出す場所である(この説明ができていないこと。「人類学者」という表現がなく、単に「研究成果とできる」などとしていても可。
② (未開の世界とは) 自分たちとは異なった文化や生活をしている人びとが住む場所である(この説明ができていないこと。

③ (そのような意味においては) われわれが知らない場所は地球上からなくなった(この説明ができていないこと。「未開の世界はなくなった」という表現でも可。ただし、①②の説明がなく、単に「未開の世界はなくなった」としているだけでは不可。

問二 私たちは日常の生活において、円滑さや安定性を目指して、意識することなくほぼ決まりきった手順で他者や現実と関わっているから。(61字)

・①＝3点、②＝3点、③＝3点。(計9点)

① (私たちは、日常において) 他者との関係や営みを円滑に進め、新しい何かが起こる可能性や、何かが悪化変化していくリスクを減らそうとする(＝安定を目指している)(この説明ができていないこと。

② (そのために) 与えられた型通りの行動をとっている(この説明ができていないこと。「類型的知や処方箋的知に縛られている」などとだけして、「類型的知・処方箋的知」の内容の説明がないものは、1点。

③ (それは) 無意識的なものである(この説明ができていないこと。

問三 常識的知を批判的に捉え直すことによって、他者や個別の生活の現実を、新たな意味があふれてくる存在として認識できるようになり、そうした日常に息づいている多様な現実や問題性を見出し、読み解き、目の前に反省的に取り出してくる営みとしてのフィールドワークが可能になるから。(132字)

・①＝4点、②＝4点、③＝4点。(計12点)

① (類型的知や処方箋的知を含む常識的知を批判的に見る) ことが説明できていること。「類型的知や処方箋的知」という常識に縛られていることに気付く」などの表現でも可。「異なるもの」として「まなざす」などとして、その内容の説明がないものは不可。

② (それによって) 私たちは、他者や個別の現実を、充実した意味を持ち、新しい意味があふれてくるものとして捉えることができる(「or」日常をつねに揺れ動き、変動し、変質する不安定な部分からなるものとして捉えることができる)(この説明ができていないこと。

③ (そして) 日常に息づいている多様な現実や問題性を見出し、読み解き、反省的に取り出す営みが可能になる(この説明ができていないこと。単に「日常性のフィールドワークが可能となる」としただけのものは2点。

◆各設問共通

▲内容説明の設問では、末尾の句点がないものは▲1点減点。ただし、現代語訳の設問では、句読点は不問。

問一 10点

(模範解答)

A ○ 3点

B ○ 3点

上代に柳を多く歌に詠んだ地だったので、現在も柳があるのだろうと期待したが、

C ○ 4点

実際に柳はなく、ただ春霞のかかる川辺の情景だけを見た。 (10点)

◆各加点要素の加点の条件【A・B・Cに関して部分採点】

A 「上代に柳を多く歌に詠んだ地だったので」(3点)

○ (六田の里が、) 昔から柳が詠まれた地であることが書かれていれば可○。

○ 「昔から」という表現が無くても、(六田の地が) 川柳の歌枕であることが書かれていれば可○。

B 「現在も柳があるのだろうと期待したが」(3点)

○ 「現在も柳があるだろう」と思っている内容であればよい。

○ 「自分もその柳を歌に詠もうとしたが」「柳を見ようと思ったが」なども、「現在、柳があることが前提」となっているので可○。

C 「実際に柳はなく、ただ春霞のかかる川辺の情景だけを見た。」(4点)

※実際にみた風景としては、柳を見ていない(確認できていない)、霞のかかる川辺だけをみたということがわかれば可○。

(模範解答)

A ○ 3点

土田で蕎麦切を食べた時、店も食器もみすぼらしく薄汚れていて食欲も失せたが、
B ○ 3点

有間皇子が処刑地に護送される途中で飯を盛って食べた椎の葉よりはましだと、

C ○ 4点

自分の心を慰めて食べたということ。

◆各加点要素の加点の条件

【A・B・Cの各要素に関して部分採点】

A 「土田で蕎麦切を食べた時、店も食器もみすぼらしく薄汚れていて食欲も失せたが、」 (3点)

○ ①土田で出された②蕎麦切(食い物)の食器が③薄汚れていた(③見るからに不味そうだった)「という3
点が提示されていればよい。3点がそろっていない場合は加点できない。

B 「有間皇子が処刑地に護送される途中で飯を盛って食べた椎の葉よりはましだと」 (3点)

○ 「刑地に赴く途次で使った有間皇子の椎の葉(食器)よりはまし」「刑地に赴く途次でとった有間皇子の食事
よりはまし」という内容が提示されていればよい。

× 「有馬皇子が」が抜けると、自分が護送されることになるので、ヌケは不可×。

C 「自分の心を慰めて食べたということ。」 (4点)

○ 「自分で自分の心を慰めて食べたということ。」「自分に言い聞かせて食べたということ。」「自分を慰めて
食べたということ。」等々、「無理やり自分に言い聞かせてなんとか食べた」という内容が提示されていれ
ばよい。

(模範解答)

A ○4点

何度も振り返っては、その度に遠く吉野の里を見るのだが、
B ○3点

こんなこともこれが最後であると思つて、

C ○3点

またもや別れる吉野の里であることよ。

◆各加点要素の加点の条件

【A・B・Cの各要素に関して部分採点】※「和歌を現代語訳する問題」

A 「何度も振り返っては、その度に遠く吉野の里を見るのだが、」 (4点)

※「かへり見るよそ目も」の訳

○「振り返つて、**吉野の里の遠景を見る**」という内容が示されていればよい。

○「吉野の里」を振り返つてみたことが、現代語訳全体でわかればよい。

○「よそ目」は「遠くから見た景色・遠景」の意味。「遠く(吉野の里を)見る」は、「遠くに眺める」「はるか遠くに見える」「遠くに望む」のような表現でもよい。

△「遠景」という要素がなく、単に「吉野の里を眺める」は「よそ目」を踏まえていないので▲3点減点で、

△1点

×「よそ目」を「よそ見をする」とか「よそ者の私がみる」などとしているものは不可×0点。

B 「こんなこともこれが最後であると思つて、」 (3点)

※「今をかぎりにて」の訳

○「これが最後だ」ということが書かれていれば、次項に当てはまらなければ○。

×「今をかぎり(これ(今)が最後)」とする「こんなこと」とはAの内容なので、「最後である」と書かれていても、最後とする内容がAのような内容(「吉野の里を見る最後・吉野の里と別れる最後」と異なるように読み取れる場合は不可×0点。

×「最後」を「最期」としている場合、「かぎり」を「命の終わり」ととっているとして不可とする。×0点。

C 「まともや別れる吉野の里であることよ。」 (3点)

※ 「まともわかるるみ吉野の里」の訳

○ 「(何度か視界から消えては現れたが)まともや別れる吉野の里であるよ」という内容が書かれていれば○。

△ 「まともわかるる」の、「まとも」のニュアンスが無い場合▲1点減点△2点。

× 「わかるる」は「吉野の里と別れる」こと。「道が分かれる」とどっているものは不可×0点。

△文末に詠嘆のニュアンス「…ことよ。」「…だなあ。」が無い場合、▲1点減点△2点。ただし、詠嘆のニュ

アンスは「…だよ。」「…だ。」「…だ。」「なども詠嘆として広く許容する。(「…吉野の里。」のようになっていなか

れば原則○ということ。)